

世界遺産登録に向けて

絵図から見えること(10) — 鹿伏夜雨 —

「ふるや夢 雫やうつつ夜の雨」

音に寢覚を磯の芦の屋」

と相川八景に詠まれた鹿伏は、相川市街地の西南部にあり、明治34(1901)年までは、二見七浦の一つに数えられていました。

鹿伏村の家・屋敷は、中央部を流れる中津川周辺に集まっています。が、金銀山の本格的な開発が始まると、慶長5(1600)年に、下相川にあった善知鳥神社が下戸村に、元和元(1615)年、鶴子銀山にあった神明神社が鹿伏村にと、それぞれの村境に移ってきました。また、慶長17(1612)年には、摂津の天王寺から来た福寿院宥乗が、春日崎のふもとに医王寺を開くなど、神社や寺が増えていきました。医王寺については、『佐渡相川志』に「境内山岸二温泉二似タルモノアリ。汲ミテ疥癬二用ユ」とあります。

一方、元和2(1616)年に越前岩倉からやって来た人々によって、未開発だった段丘の開墾が行われました。そこは「開」と呼ばれ、新田畑開発が進みました。

鹿伏には、銅床屋や葉草園が置か



「佐州相川略図」鹿伏村部分
新田が描かれているのがわかる



山尾定政筆「相川八景 鹿伏夜雨」

れるなど、鉱山都市相川の影響を受けながら、海の生業を中心とする村から、米や畑作物を供給する近郊農村へと変化していきました。

◆市役所世界遺産推進課

(金井就業改善センター内)

☎63-5136



ジオパーク、推進日記

36

霧島山と金北山に咲く花はなぜ違う？

春といえば、きれいな草花。毎年、その草花を楽しむに多くの方々からトレッキングに訪れています。私たちが暮らす佐渡には、たくさんの草花が自生していますが、環境が変わると自生する植物の種類にも影響があります。

宮崎県と鹿児島県の5市2町で展開している霧島ジオパークには、標高1700mの韓国岳を最高峰とする火山群の総称である霧島山があります。霧島山の植物の特徴は、同じ場所でも生息する植物が火山活動とともに移り変わっていくことです。新燃岳が噴火した直後の火口周辺は何もない裸地でしたが、噴火から3年経った今では、ミヤマキリシマが咲き始めたそうです。ミヤマキリシマは火山性のガスや土壌に強く、噴火後の大地に根付く先駆的な植物です。そして、火山の活動が静まり、数百年から1千年くらいの間に噴火がなく森林化が進むにつれ、ミヤマキリシマの自生地は次第になくなっていきます。このように、大地の動きによって、自生する植物の種類も移り変わっていきます。

それでは、佐渡島の環境はどうでしょう。佐渡の山々は、太古の火山から噴き出したものが海中に没し、それ

らが隆起して形成されました。活火山ではないので、火山灰や火山ガスなどの影響で植物が時間とともに変化することがありません。また、佐渡は北緯38度線上に位置しているため、北方と南方の豊富な種類の植物が自生していることや、多くの草花を食べてしまう鹿や猪が生息していないので、動物による食害で絶滅していく草花が少ないことも特徴です。



私たちの周りに咲いている草花は、その土地の風土と深い関係があります。佐渡は、数多くの草花が自生する花の島です。いつまでもこの草花を多くの人が楽しめるよう保護していくことも大切です。

春を彩る草花を楽しみながら、足元の大地にも注目してみたいかがでしょうか。

◆教育委員会社会教育課

ジオパーク推進室(佐渡博物館内)
☎52-2447